

「信卷」真仏弟子釈所引『安楽集』の考察

平 原 晃 宗

親鸞は『教行信証』「信卷」真仏弟子釈で、

言「真仏弟子者真言對_ト偽_ニ對_{スル}也。弟子者釈迦諸仏之弟子_{ナリ}金剛心行人也、由_レ斯信行_ニ必可_ク超_ス証_ニ大涅槃_ニ故曰_ク真仏弟子_ト。」

（『定親全』一・一四四頁）

と述べる。この文の明証として幾つかの文が、真仏弟子釈では引用されているが、この中で最も多く引用されているものが、道綽の著述した『安楽集』の文である。道綽は七高僧の一人として、殊に親鸞の時機相應の思想に影響を与えたことは周知のことである。時機相應の思想とは、仏教が時代や人間に相應する法であることを明らかにすることを主題とするが、それは時代や人間に迎合することを意味するものではない。時代と人間という事柄を通して仏教が、普遍的で真実なる教えであることを具体的に確認しているのである。また、時機を問うことは、仏教を依り所とする真仏弟子が明確になるとも考えられるであろう。本論では、真仏弟子釈にある『安楽集』の引用を通して、時機相應の法が真仏弟子を生み

出す法であることを考察していきたい。

親鸞は、時機相應の明証として『教行信証』「化身土卷」で『安楽集』所引の『大集月藏經』（『定親全』一・三二二―三頁）と道綽の自釈を引用している。『大集月藏經』の文では、まず釈尊が亡くなって五つの時代区分がなされている。初めの三つの五百年、すなわち正法の五百年、像法の千年の間は、戒・定・慧が保たれていることが述べられている。それは釈尊在世・正法の時において戒・定・慧を保持することによって証果を得ることが、仏弟子の証しとして決定されたことを意味する。しかし、第四以降の五百年、すなわち末法の時の衆生は仏の名号を称する者である。これは、釈尊が入滅して時間が経過した末法であるために戒・定・慧を保持することによって証果を得ることが、単に不可能になったことを意味するのではない。元々、戒・定・慧という修行をすることによって、未来に証果を得ようとすることは、人間の能力・努力を基調とするものであつて根本的に時機相應の仏教は成立

しないのである。このような末法という時の教示は、釈尊が入滅して時代が経過し、曖昧になつた仏教を衆生に対して問題提起をしているといえる。それは、どこまでも能力・努力に執着し、証果を得るため修道実践し続ける衆生の現実を露呈するのである。つまり、このような末法という時の問題を踏まえることにより、人間の能力・努力を基調として修道を行う末法に生きる仏弟子が明らかになると考えられる。

末法の仏弟子を、『大集月藏經』を踏まえ『安樂集』では「仏の名号を称すべき時の者」「恒に懺悔する人」と説く。これを一言で言うならば本願を信じて念仏を行ずる「金剛心の行人」ということであろう。「仏の名号を称すべき時の者」とは、常に行者に用き続ける如来大悲の用きを自証している念仏行者のことである。また、「恒に懺悔する人」とは、如来本願の用きによって、自力に執着する我が身の実相を照明されることに対して懺悔する人である。このように如来大悲を自証する真仏弟子において、願力の用きによる念仏こそ懺悔の道にほかならないのである。そこに懺悔、称名念仏ということは自力の上に成立するのではなく、他力、選択本願によつて成立することが明されるのである。それは

浄土真宗者^ハ在世・正法・像末・法滅、濁惡^シ群萌^シ齊^シ悲引^シ也[。]

（化身土巻『定親金』一・三二〇頁）

と述べられることから了解できるであろう。ここに末法に

生きる仏弟子が本願を自証する「金剛心の行人」であることを読み取るのである。

以上のように、時機を通して末法における仏弟子が「金剛心の行人」であることを考察してきたが、次に「弟子とは釈迦・諸仏の弟子なり」と述べられることを考えていきたい。

ここでは、弟子を釈迦だけでなく、釈迦・諸仏と述べられることに注意すべきである。もし、ここで「釈迦の弟子」とするならば、釈尊を宗教的人格者とし崇拜して、あたかも修道によつて釈尊になることを目的とする釈迦教を意味することになる。「釈迦・諸仏」とあることは、釈尊を釈尊たらしめたのは本願であり、その本願を自証してきた者が諸仏となり、本願を証すことにおいて仏道が成立することを示すといえよう。もし仏教が時機相応の教法と言われるのであれば、それがどの時代においても衆生において身証されなければならない。仏教がどの時代においても普遍的な教えとなるためには、諸仏により本願が自証されてきた歴史によつて証明されるのである。このような仏教を時機相応たる法として成立せしめるのは、諸仏の教法の伝持による歴史であるといえよう。このことは真仏弟子釈で引用される、『安樂集』説聴方軌章にある『大集經』から明かになる。

『安樂集』云、^ツ拠^テ諸部^ノ大乘^ニ明^シ説聴^ノ方軌^者ハ、『大集經』云於^テ説法^者一^ニ作^シ医王^想一^ニ作^シ拔苦^想一^ニ所説之法^ヲ作^シ甘露^想一^ニ作^シ醍醐^想其

聽法者ノヒトバ 作セ 增長勝解想ノヲ 作セ 愈病想ノヲ 若能如是ノ 說者聽者皆堪ハ、カケテリ 三
紹隆セウリウ 弘法ニ 常生ニ 弘前ニ。

〔定親全〕一・一四五頁

ここでは諸仏である説者と、仏弟子である聽者の相応関係を説いている。説者が身証した教を聽者に開示していき、これを受けて聽者が教を身証していくことが仏弟子の歩みとして歴史的に展開されるのである。教を聴くことは自己を問うものであり、自身が自証されるにほかならない。それは本願を自証することであり、教を聴くという事実を離れて仏教が真実であることの証しはないのである。諸仏から教えを聴き、仏弟子達が教を身証する歴史によつて、仏教はどの時代においても生きた教えとなつてくるのである。つまり教が機によつて証される歴史により、仏教が時機相応の法として成立するのである。

またここで注意しなければならないことは、真仏弟子釈で引用されている『安樂集』で、この説聴方軌章が中心になつてゐることである。それは説聴方軌章に「諸部の大乘に拠つて」という言葉で、他の文を内包しているからである。つまり、真仏弟子釈に引用される『安樂集』は「説聴方軌」ということで仏弟子を明らかにしていると考えられる。これらのことから「弟子とは釈迦・諸仏の弟子」と言われることを通して、仏教を時機相応の教法としてきた仏弟子たちの歴史が

示唆されていると了解できるのである。

以上のように、親鸞は時機を問題にすることにより、人間が能力・努力によつて修道を行うという執着を目覚めさせるものが「末法」であると了解する。このような正像末という時を問題とした『安樂集』を引用することにより末法の仏弟子は、戒・定・慧を保持する正法時の仏弟子ということではなく、「仏の名号を称すべき時の者」「恒に懺悔する人」、つまり「金剛心の行人」と定義するのである。その「金剛心の行人」とは、如来本願の用きによつて執着する我が身の実相を照明されることに対して仏の名号を称す行者のことである。このような仏弟子により本願が自証されてきた歴史によつて、仏教がどの時代においても生きた教えとなる。つまり、仏教を時機相応たる法として成立せしめるのは、仏弟子達の教法の伝持による歴史であるといえるのである。そこに真仏弟子釈において『安樂集』の説聴方軌章を引用した意図があると考えられる。これらのことから、仏教が時機相応の法として仏弟子を生み出す法であることが了解できるのである。

『定親全』は『定本親鸞聖人全集』（法蔵館刊）の略。

（キーワード）「信巻」、『安樂集』、仏弟子、時機相応

（大谷大学特別研修員）